

本校の研究



I 章 研究の概要

互いに磨き合い、学び続ける子供の育成 — 一つの発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり —

1 研究主題について

これからの社会は、人工知能の進化、あらゆる分野のグローバル化等により、これまで以上に複雑で予想困難なものとなっていくとの予測がある。

そのような社会を生き抜いていかなければならない子供たちに必要な力として、中央教育審議会答申^{*1}（以下、中教審答申）において、資質・能力の三つの柱が示された。その三つの柱とは、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」である。

子供たちは、学習を通して習得した「知識・技能」を活用しながら、「思考力・判断力・表現力等」を発揮し、他者と協働することを通して、様々な視点から考えていく。その過程では、「知識・技能」が定着し、新たな「知識・技能」が習得され、「思考力・判断力・表現力等」が高まっていき、「学びに向かう力・人間性等」も同時に育まれていくものと考えられる。つまり、三つの柱は互いに関わり合いながら、育っていくものである。

それでは、資質・能力に関わる子供たちの実態はどうだろうか。本県の学習状況調査の結果^{*2}によると、資質・能力の柱の一つである「学びに向かう力・人間性等」に含まれる、学習意欲について、県全体として学年が上がるにつれて低下するという傾向があることが分かった。このことから、資質・能力の中でも「学びに向かう力・人間性等」を育てていくことは、本県の重要課題の一つであると考えられる。

また、本校においても同じような傾向があったため、「学びに向かう力・人間性等」を育てていくことは重要と考え、過去2年間、学習意欲を育てることを目指し、実践を積み重ねてきた。そして、昨年度の教育研究発表会では、「知識・技能」が定着し、「思考力」が育っていく過程や、授業終末に取り入れた、観点を明確にした振り返りにより、次に取り組むべき課題を見いだす姿が見られた。また、参会者から、学習意欲を育てる働きかけを自校でも取り入れたいという意見を多くいただき、一定の成果を得たと考えている。

しかし、中には、振り返りを行うことの意義に気付いておらず、学んだことは記述できても、それを本当に理解したかどうかや、どのような学び方をしていけばよいかといったことを、自覚できなかった子供もいた。したがって、全ての子供が、解決すべき課題や学びの成果を適切に見つめ、学び続けようとする意欲を高めたり、主体的に次の課題を見いだしたりすることについては、まだ研究の余地が残されていると考える。また、その研究を進めることが、本県の課題を解決することにもつながるだろう。

そこで、私たちは昨年度までの研究成果や香川県教育委員会が推奨している授業改善の視点^{*3}を生かしつつ、より一層意欲的に学び、他者と協働しながら考え続ける子供を育成していきたいと考えた。

*1 中央教育審議会、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』、平成28年12月21日、27-31頁

*2 香川県教育センター、『平成29年度 香川県学習状況調査報告書』、平成30年2月、12-13頁

*3 香川県教育委員会事務局義務教育課が作成した、『授業改善 5つの視点 「学びのときめき」のある授業になっていますか？』（平成27年10月）のリーフレットには、1 課題設定、2 見通し、3 言語活動、4 振り返り、5 授業全般の視点と、視点毎に授業者が留意しておくことが示されている。

教科等の学習内容について関心が高まった子供は、課題の解決に向けて、各教科の見方・考え方を働かせて自ら考えるだけでなく、他者の考えやその理由等を注意深く聞き、自分の考えを再検討し、様々な解決方法を用いて考えていこうとする。その課題解決の後には、自分自身の成長や他者と協働しながら学ぶことのよさを感じ取るとともに、自信を高め、新たに発見した問題*1を共有することで、次に解決すべき課題を設定し、その課題の解決に向けて、さらに学び続けていこうとするのである。

そのような子供の姿を、本年度、私たちは「互いに磨き合い、学び続ける子供」として以下のように定義し、その育成に向けて授業づくりを行っている。

【互いに磨き合い、学び続ける子供】

課題を解決するために、各教科の見方・考え方を働かせて自ら考え、他者の考えに耳を傾けながら追究し、見いだした次の課題についても考え続ける子供

2 研究副主題について

互いに磨き合い、学び続ける子供を育成するために、「個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり」を研究副主題に掲げた。この副主題にある「メタ認知」は、昨年度研究の成果の一つである、振り返りの充実に基づくものであり、振り返りの場面における自己を見つめる力をほかの場面にも広げて、活用していこうと考えて設定したものである。メタ認知を促すことで、子供たちは自身の課題への取り組み方といった学びの過程を意識したり、各教科の「知識・技能」の習得だけでなく、協働することのよさの実感といった学びの成果を通して、学び方やその価値に気付き、自律した学習者へと近づいていこうとする。このような過程において、「互いに磨き合い、学び続ける子供」が育っていくと考えたのである。

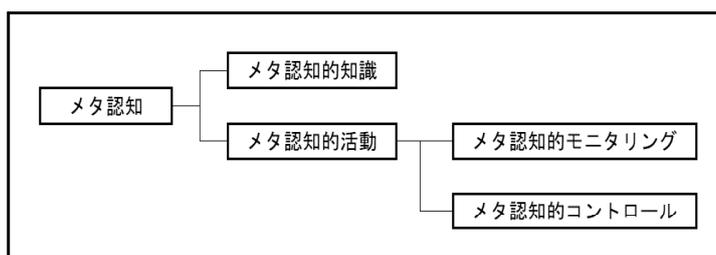
以下では、その実現に向けた授業づくりの概要について述べる。

(1) メタ認知について

① メタ認知の定義

メタ認知とは、一般的に「自分で自分の心の働きを監視し、制御すること。認知についての認知。(広辞苑第七版)」とされている。また、メタ認知は、先に紹介した中教審答申において、資質・能力の「学びに向かう力・人間性等」に属するものとされている。このことは、メタ認知が学習意欲と強い関連があることを示唆するものである。

三宮真智子氏（大阪大学大学院教授）は、メタ認知を「自分の考えの矛盾に気付いたり、課題の特性を把握したうえで解決方略を選択するなど、通常の認知よりも高次の認知」と捉えている。また、メタ認知を右図のように分類している*2。



【メタ認知の分類（三宮、2008を参考に作成）】

例えば、学習後の振り返りの場面において、メタ認知が働くとすると、「振り返りの際は、学習前の自分と、学習後、できることが増え、理解が深まった自分を比較し、学習の成果を見いだすとよい」等のメタ認知的知識に基づいて、メタ認知的活動が行われる。その活動は、自分の学習を改めて見つめ、その後の学習に対する取り組み方を見だし、選択していくものである。また、前半部分の自己の学び

*1 一昨年度より、本校では、問題を「個あるいは学習集団で解決すべき事柄」、課題を「問題を解決するために、行動を起こすことを意志表明したもの」を表す語として用いている。平成29年度教育研究発表会要項参照。

*2 三宮真智子編著、『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』、北大路書房、2008年、39-44頁

等を客観視し、状態を把握する、メタ認知的モニタリング（以下、モニタリング）と、後半部分の把握した自己の学び等を必要に応じて修正する、メタ認知的コントロール（以下、コントロール）に分けて考えることができる。

上述したことを踏まえ、本研究においては、メタ認知を「自分の学習に関わる認知について、自分で監視し、制御すること」と捉えている。

② メタ認知を促すことの価値

昨年度の研究を振り返ってみると、理解度や習得できたと思われる「知識・技能」などについての子供の自己評価と教師による見取りにずれがあり、自分自身で自己の学びを見つめることが不十分な子供もいるという課題があると分かった。そのような子供と、しっかりと自分の学習を振り返ることができていた子供の差こそ、メタ認知の働きにあるのではないかと考える。

実際、学習意欲が高い子供は、進んで自分の学習について振り返りを行い（モニタリング）、それを次の学習に生かしていこうとしていた（コントロール）。また、メタ認知を働かせることができた子供は、自分の学習を客観的に見つめることで、自分の成長に気付いて自信を高めたり、次に解決すべき課題を見つけてその後の学習への見通しをもったりし、学習意欲を高めていたと考えられる。このように、メタ認知と学習意欲は互いに循環的な関係にあるものであるが、本研究においては、メタ認知から学習意欲への流れを強化することで、学習意欲を育てていくのである。

授業において、メタ認知を働かせることで、子供たちは「知識・技能」を生かして考えているかどうかや他者と協働することができているかどうかを自ら意識し、解決に向かう。また、課題解決後には、自己の学びを振り返り、学びの成果を感じることで、身に付けた資質・能力を様々な場面で活用しようとするだろう。そのように、学び方を意識し、主体的に他者と関わりながら、課題を追究する姿こそ、「互いに磨き合い、学び続ける子供」であると考えられる。

ここで、第4学年理科（空気の温まり方）の学習を例に挙げる。実験結果を予想する際は、「前に調べた水の温まり方を思い出して、予想するといいね」と、既習事項を振り返ることや、「自分は、水と同じ温まり方をすると予想したけれど、友達はどんな予想をしたのだろうか」と、友達の考えを考慮することなどが、メタ認知を働かせることでより強く意識される。また、自分の予想について根拠の妥当性を確かめたり、友達の意見を基に自分の考えを再検討したりすることにより、自分の考えや学習の進め方を客観的に見つめるようになると考える。さらに、水の温まり方等を手がかりにした予想を確かめる実験を行い、「どの班も同じ結果になっている」「空気も水と同じ温まり方をする」などと、複数の班の結果から空気の温まり方について結論を導くことで、予想と結果をつないで考えることのよさや、協働しながら考えることのよさに気付くだろう。こうして学びの成果を実感することで、また次の実験においても予想と結果をつないで考え、友達の考えや結果も考慮しようという意欲が育っていくのである。

このように、メタ認知を働かせることで、互いの考えを吟味し、主体的に課題を解決しようとする意欲をより効果的に育てていくことができると考える。そして、最終的には、物の温まり方についての知識と実験技能、根拠のある予想や仮説を発想する力、主体的に課題を解決しようとする態度といった資質・能力をバランスよく育成することができるのである。

このことについては、深谷達史氏（広島大学大学院准教授）が著書で次のように述べている。

さらに、認知的方略やメタ認知的方略を用いて学習を行うことで、深い理解が達成されます。理解が達成され、よくわかったという実感が得られれば、「やはり意味を理解することが大事だ」といったように、学習についての考え方が更新されたり、その内容や教科の面白さに気がつき意欲が高まったりすることが期待されます。

（自己調整学習研究会監修、『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』、北大路書房、2016年、18-19頁）

このように、メタ認知を働かせることで、子供たちは学び方のよさを実感する。そうすると、それらを意識し、身に付けた学び方を活用し、他者と協働しながら学習を続けていく。それにより、新たな「知識・技能」を習得し、「思考力・判断力・表現力等」も高めつつ、「学びに向かう力・人間性等」が育っていく学びのサイクルができ、子供たちの学びが主体的・対話的で深い学びになっていくと考える。

さらに、学習を通して高められたメタ認知は、予想困難な社会において、様々な問題に直面した際、課題を主体的に設定し、自力で、または他者と協働することを通して解決していくために、役立つ能力の一つとなるだろう。その能力を発揮し、目標に照らして軌道修正を行いつつ、目標達成に向けて進んでいく過程を繰り返すことは、自分の人生における目標の達成に向けて、自律的に生き、社会の中で他者とよりよい関係を築きながら、成長していくことにつながるだろう。

（２）個の発達に応じること

メタ認知を促す際は、発達段階や子供一人一人の特性に配慮しつつ、働きかけを行うことが大切であると考えられる。ここでは、メタ認知と発達段階及び個の特性の関連を述べる。

① 発達段階

メタ認知は、自分自身のことを客観的に見つめるという高度な認知機能であるため、その機能を働かせることができるかどうかは、幼児期からの発達の影響を大きく受けることとなる。

メタ認知に関わる先行研究^{*1, *2}によれば、メタ認知は、自分の視点と他者の視点を区別できるようになることに伴い、主に中学年頃から発達してくると言われている。一方、幼児期には、原初型のメタ認知を発達させていると言われている。したがって、低学年でもメタ認知を取り入れた先行研究^{*3}があり、必ずしも低学年ではメタ認知を働かせられないということではないと考える。本校でも、先行研究^{*4}において低学年でメタ認知を取り入れた授業づくりを行っていた。

また、小林登氏（東京大学名誉教授）及び片岡宏隆氏（ベネッセ教育開発研究センター）は、2008年に発表されたドイツの論文^{*5}を紹介するレポートの中で次のように述べている。

…（前略）… 幼児の「心の理論」の発達と、それに続くメタ認知の発達とを結びつける研究が盛んになってきている。

「心の理論」とは、他者の信念、欲望あるいは意図を推測したり、その推測をもとに他者の行動を予測する能力を形成する理論である。「心の理論」は、3～4歳で急速に発達して、遅くとも5歳までには獲得されると考えられているが、前頭前野の機能の発達の变化と関連づけられている。子ども達は、こうして出来上がった「心の理論」を使って、他人の行動を予測し、共感の心などを育て、人間関係を結び、家庭生活、社会生活を営んでいるのである。

…（中略）…

子ども達が自分自身でモニタリングする技術、さらには自分自身でモニタリングをコントロールする技術の発達も、当然のことながら、教育におけるメタ認知的知識の発達に重要である。学習することが易しいか否かの判断、学習そのものの判断、知っている色々な知識のお互いの関係の判断は、子どものころから徐々に発達すると

*1 三宮真智子編著、『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』、北大路書房、2008年、39-44頁

*2 藤谷智子著、『幼児期におけるメタ認知の発達と支援』、2011年

*3 神保勇児著、『第1学年児童の「問い」を生起させる発言とメタ認知的活動についての研究』、2013年

*4 平成19年度～平成23年度の研究紀要参照。

*5 Wolfgang Schneider, “The Development of Metacognitive Knowledge in Children and Adolescents : Major Trends and Implications for Education ”

考えられる。

上述の技術のモニタリングとコントロールとの間の関係を見ると、6歳でも学習課題が難しいのか易しいのか判断出来るが、10歳児のように難しい問題を学習するのに時間を配分することは出来ない。メタ認知的知識をもっていることと、実際に使えることとは別の話なのである。

…（中略）…

相互教育法により、効果的な読解を学ぶ際にあらかじめやり方を考えさせることが可能であって、それによって必要なメタ認知を改善することができる。子ども達が7～8歳になれば、学習の仕方をあらかじめ考えさせると効果が上がることを教えることができる。

{小林登・片岡宏隆、『8.子どものメタ認知的知識の発達と教育』、チャイルド・リサーチ・ネット、2009年10月30日掲載、<https://www.blog.crn.or.jp/report/01/08.html>、（参照2018年11月20日）}

本校では、これまでに紹介した先行研究を参考に、子供の発達段階に配慮してメタ認知を促す働きかけを見いだそうと、研究を進めている。例えば、低学年の場合は、友達に自分の考えを説明し助言をもらうことや、教師が明示的に指示することなど、他者の力を借りてメタ認知を促すことができると考える。そのように、他者との交流を通して、自分自身のことについて客観的に見つめる経験を積ませることで、中学年以降では、他者の力を借りなくてもメタ認知を働かせることができるようになるだろう。

② 個の特性

他の認知機能がそうであるように、認知機能の一つであるメタ認知についても、その機能がどれだけ発達し、働かせることができるかには、個の発達に基づいた個人差が見られる。そこで、一人一人の発達の程度に目を向け、個の特性に配慮しつつ、メタ認知を促す働きかけを考えていくことが大切である。特に、発達障害等のある子供については、その特性に応じた働きかけを行うことで、メタ認知を促すことができ、学習意欲を高めることができると考える。したがって、その働きかけの在り方についても研究を始めたところである。

子供一人一人の実態に基づき、個の特性に応じた働きかけも行うことで、全ての子供が「互いに磨き合い、学び続ける子供」に育つのではないかと考える。

(3) メタ認知を促す授業づくり

本校における先行研究では、メタ認知的知識を「予想と結果を比較しながら考察するとよい」などといった「思考の手がかり（思考様式）」と捉えていた。

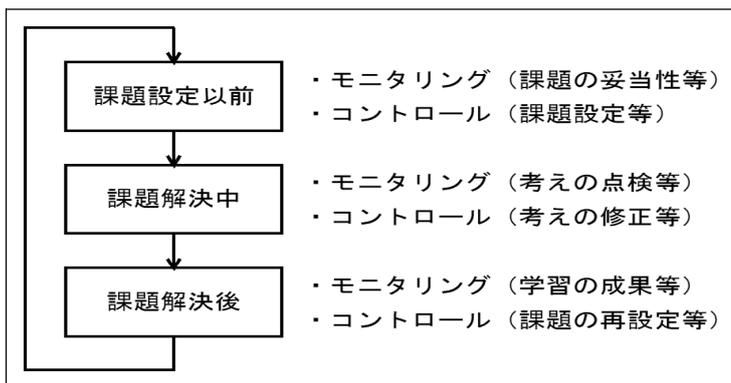
本年度は、思考の手がかりに加え、「相手がよく知っている内容に例えることで、難しい話を理解しやすくすることができる」といった課題の解決に向けた効果的な方略の使用についての知識と「私は英文読解は得意だが、英作文は苦手だ」や「目標をもって学習したことは身に付きやすい」などの、人間の認知特性についての知識もメタ認知的知識と考え、授業づくりを行っていく。

その際、課題解決中であれば、各教科の見方・考え方等といった思考の手がかりを生かしているかや、友達の考えに耳を傾けているかといったことを意識して、課題解決に向けて適切に学習を進められているかどうかをモニタリングし、コントロールを行う。さらに、課題解決後には、学習前後の「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の高まりを実感し、自分自身の成長についてメタ認知を働かせることで、分かったことや次に取り組んでみたいことを明らかにしていくのである。つまり、学習過程において、何をモニタリングし、どのようにコントロールしていくかといったメタ認知的活動が重要となる。

では、実際の授業の各場面において、具体的に何をモニタリングし、どのようにコントロールしていけばよいのだろうか。自身の修正点をつかめていないと正しく修正できないと同様に、まずは、適切にモニタリングできることが重要である。したがって、教師は、どの場面で何をモニタリングさせるか

を意識して、授業づくりを行っていくのである。

学習の流れに沿って考えてみる。学習の流れについて、自己調整学習の理論^{*1}では、予見段階→遂行段階→自己内省段階といった表現が用いられている。それを踏まえつつ、本研究では、課題解決の過程を意識し、課題解決中を中心に、課題設定以前と課題解決後の3段階に分けて表している。メタ認知的活動は、右図にあるように、実際の学習活動を通して循環的に行われるものである。



この流れを、例えば第2学年算数科（たし算の筆算）の学習における課題解決に当てはめてみる。まず、課題設定以前の場面で、難易度や既習事項等を基に、解決すべき課題になっているかどうかを判断するモニタリングを行い、その判断に基づいて課題を設定するコントロールを行う。課題解決中は、「図をかいて考えればできそうだ」「前の勉強のときのように、10の束をつくって考えるとよさそうだ」とモニタリングし、解き方を選択するコントロールを行う。また、「思ったよりも難しい」と課題を再確認したり、「今の考え方でやっているか、足りないことはないか」や「自分は式だけで考えて間違ってしまうことがあるから、よく見直そう」と確かめたりするモニタリングを行う。それに基づき、「今の方法で続けて考えていこう」と解き方を是認したり、「繰り返しを忘れていた。もう一度計算し直そう。やっぱり、図をかいて考えると、間違いに気付けるな。これからも図をかいて考えよう」と、修正したりしていくコントロールを行う。また、「友達の答えも同じかな。まだ、考えを聞いていなかったな」とモニタリングし、「友達の考えを参考にすれば、間違いやもっとよい考え方が見つかるかもしれないから、友達の考えを聞いてみよう」とコントロールしながら、学習を進めていく。そして、課題解決後は、きちんと解決できたかを判断したり、できるようになったことは何かを確かめたりするモニタリングを行い、次に取り組むべき問題を見だし、課題を設定しようとするコントロールを行うのである。

【課題解決の過程とメタ認知的活動（深谷，2016を参考に作成）】

次に、本校では、子供たちがそれぞれの学習活動中にモニタリングしたり、コントロールしたりする意識は、メタ認知の高まりに応じて、より具体的なものや、明確な根拠や見通しを伴ったものに変化してくると考えている。

	低	メタ認知の高まり	高
課題設定以前	・〇〇したい	・～だから、〇〇したい ・できそうかな	・～だから、△△のために〇〇したい ・〇〇を使うと、できそうかな ・解決すべき課題は、〇〇だ
課題解決中	・したいことが、できているかな	・何を使うといいかな ・うまくできているかな ・足りないことはないかな ・～だから、〇〇が使いそう ・友達はどう考えているのかな	・何をどのように使うといいかな ・解決に向かっていているかな ・～だから、〇〇より□□を使うとよさそう ・別の方法はないかな ・友達の考えを聞いて、比べよう
課題解決後	・できたかな、どうかな ・次は〇〇したい	・何ができるようになったかな ・どうして、できるようになったのかな ・△△ができたから、次は〇〇したい	・何が、どうして、できるようになったのかな ・〇〇を用いると、次は□□を解決できそう ・次は△△のために、〇〇したい

例えば、課題設定以前の意識であれば、何となく「〇〇したい」という意識から、根拠

【各場面におけるメタ認知の高まりとメタ認知的活動に伴う意識の例（本校作成）】

*1 自己調整学習研究会編、『自己調整学習 ー理論と実践の新たな展開へー』，北大路書房，2012年，13-18頁

が明確になってきて「～だから、〇〇したい」という意識に高まっていく。さらに高次になると、目的意識も明確になり、「～だから、△△のために〇〇したい」のような意識に高まると考えられる。

授業づくりにおいては、学習の各場面で、メタ認知を働かせている子供の様相を具体的に想像しながら、メタ認知を促す働きかけを考え、その効果を検証していくことも重要である。本年度研究においては、メタ認知を促すことにより、前頁の表の左から右の意識へとメタ認知を高めるとともに、互いに磨き合いながら、学び続ける子供を育てることを目指している。そのような姿に育ったかどうか、実際の子供の姿を基に検証を進めていきたい。

3 本年度研究の重点

(1) 授業づくりの視点

① 個の発達に応じ、メタ認知を促す働きかけ

私たちは、資質・能力の育成に向けて、本校の研究図書に示した五つの視点^{*1}を授業づくりに生かしている。その五つの視点を大切にしながら、発達段階と個の特性といった、個の発達に応じつつ、メタ認知を促す働きかけを行うことによって、主体的な課題設定、自力解決中の自分の考えや方法の吟味、協働することのよさの実感などを促進していく。そうすることで、「互いに磨き合い、学び続ける子供」を育成することができるのではないかと考える。

メタ認知を促すためには、子供一人一人の発達を考慮し、学習内容ごとに、どの場面でどのような働きかけを取り入れていくことが効果的かを検討していくことが大切である。つまり、メタ認知を促す働きかけを考える際は、子供の実態や学習内容に基づき、先に示した三つの学習活動の場面のいずれにおいて、メタ認知的活動を促すことが有効かを考えていくのである。

② 検証のために

検証は、「互いに磨き合い、学び続ける子供」となっているかどうかと、メタ認知を働かせているかどうかの大きく2点から行っている。

「互いに磨き合い、学び続ける子供の姿」については、単元ごと、研究授業の本時ごとに具体的にその姿を設定しておき、それに照らして、資質・能力の高まりを評価するという質的な検証を行っている。子供一人一人がどのような姿に育っていて、どこまで到達しているかを見取ることが重要と考えたからである。

一方、メタ認知については、質的な面からも量的な面からも検証を行おうと考えている。なぜなら、メタ認知は、視覚的には捉えにくいものであり、検証の仕方を工夫していかなければならないと考えたからである。先行研究で多く見られるのは、発話に基づく質的な分析である。これを行う場合は、抽出児に対して行う個の見取りが活用できる。それ以外にも、ノートやワークシート等への記述内容から見取る方法、質問紙調査を用いる方法等の中から複数のものを取り入れ、個の様相を多面的に検証していく。また、量的な検証としては、佐藤・新井（1998）の「学習方略使用尺度」を活用している^{*2}。全校生に対し、同一内容の質問を定期的に行うことで、発達段階に応じた認知傾向を把握することができる。このように、学習集団としての実態を把握することも、働きかけの効果を検証する上で重要と考えてい

*1 五つの視点とは、「単元や題材の構成」「思考の手がかりの共有化」「知識・技能の習得」「対話の促進」「学習環境のユニバーサルデザイン」である。詳細は、本校研究図書『主体的・対話的で深い学びの実現に向けて 授業を変える ～5つの視点～』、文教社、2018年を参照。

*2 「佐藤純・新井邦二郎著、『学習方略の使用と達成目標及び原因帰属との関係』、筑波大学心理学研究、1998年、20、115-124頁」を参考にした、14項目からなる質問紙を活用している。学習の見通しや計画を立てているかという側面と自分の理解度を確かめようとしているかという側面を尋ねるものである。

る。

加えて、子供たちがメタ認知を働かせているかどうかを見取る際は、10頁の表が、評価規準として役立つのではないかと考えている。本年度は、実際の授業を通して子供の様子を観察し、表が評価規準としてより具体的なものになっていくように、研究を進めている。次年度には、本年度研究で見られた子供の姿を基に評価規準を明らかにしたいと考えている。

より適切で客観性の高い検証となるように、検証方法についてもさらに研究を深めていきたい。

（２）外国語科及び外国語活動の扱い

本校では、以前より全学年で外国語の学習を行っている。本年度より、外国語科及び外国語活動については、学習指導要領を参照し、新教材の扱いについて検討するとともに、坂出市で用いられている年間計画を参考に、研究を進めている。

その際、個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくりを行っていくことは他教科と同様である。外国語の学習においても、メタ認知を促し、目標設定や振り返りを行うことで、意欲的に学習に取り組む様相が見られた先行研究*1もある。他教科と同じように、メタ認知を促す授業づくりを通して、「互いに磨き合い、学び続ける子供」を育成していきたい。

（３）道徳科の扱い

道徳科においては、自己を振り返り、内省するというメタ認知的活動が学習の中心である。各教科の授業でメタ認知を促すために、道徳科の学習が、本年度研究の基盤となり得ると考えている。その授業づくりについては、Ⅲ章に詳述している。

【平成30年度研究の重点】

- 学習活動を三つの場面に分けて捉え、個の発達や学習内容を考慮しながら、メタ認知的活動を促す働きかけを見いだす。
- 「互いに磨き合い、学び続ける子供の姿」の具体から資質・能力が高まっているかどうかを評価していくとともに、メタ認知的活動に伴う子供の意識について、場面ごとの具体例を蓄積していく。
- 外国語科及び外国語活動の授業においても、メタ認知を促す働きかけを行い、その有効性を確かめる。
- 道徳科の学習を通して育ったメタ認知を働かせる力を、各教科の学習に生かしていけるように、道徳科の授業づくりの在り方を検討していく。

*1 澁井とし子著、『メタ認知ストラテジーを取り入れた小学校英語の実践』，2015年